

開

を普及

土木学会と協働



藤野P D

展開されていくのは非常につれしいこと。大学、コンサルタントが

それぞれ単独でやっても海外には食い込めない。互いの長所を組み合わせてヒューマンネットワークを構築すればうまくいく」との考えを示した。

海外で開発技術実装

その後、JICAの金縄知樹氏が「JICA A-SIPインフラ連携取組状況」、土木学会インフラマネジメント新技術適用推進委員会の長井宏平氏が「JICA-土木学会連携に

よるインフラマネジメントの技術展開の展望」の題で講演した。金縄氏は海外からの留学生の受入状況やSIP開発技術である橋梁点検ロボットカメラ、路面性状把握システムをそれぞれバン格拉デシユ、ケニアで適用した連携事例を紹介。途上国で普及・発展させた技術や経験を日本の開発現場にフィードバックする「リバース・イノベーション」を展開してい

くことを今後の展望として示した。長井氏はインフラマネジメントの海外事例を紹介。インドでは鉄道の枕木のひび割れが多数発生していることを受けて、日本で調査・分析を行った結果、アルカリ骨材反応とDEF(遅れ膨張破壊)の複合劣化であることが判明し、インド鉄道省がそれに基づいてルールを改正するなど成果があがっているとした。

ミャンマーでは橋梁の簡易モニタリングを展開し、現地政府の信用を獲得。日本の考え方を基に、橋梁維持管理制度が立案され、大規模な橋梁架け替え計画が進むなど、日本の技術が実践されていることを紹介した。そのうえで、JICAと協力覚書を締結したこと、これまでに個別に海外展開してきたことが、土木学会という組織として取り組む体制に移行するとした。

進めてきたと説明した。そのうえで研究成果と連係して「チタンワイヤーセンサーを用いた腐食モニタリング」「早期劣化構造物に対する変位モニタリング」「橋梁上を走行する大型車両の重量推定」「自走式衝撃加振装置を用いた劣化床版の健全度診断」「流電陽極材(内部挿入型)による腐食抑制技術」「流電陽極材(表面設置型)による腐食抑制技術」「FACコンクリートの複合劣化抑制効果の評価」の事例をあげ、概要を説明した。

また、北陸SIPによる短支間橋梁の手引き作成の過程で「北陸SIP若手連携会議」を立ち上げたことを報告し、4県32市町へ計50回のヒアリング調査を行ったこと、課題の整理と北陸SIPで精査した対応策などを示した。このほか、地域での技術展示会や北陸版地域実装支援体制の構築、継続的なトータルマネジメントシステムの構築などを紹介した。

市町村向け手引き作成

北陸SIP 短支間橋梁の維持で



鳥居教授

北陸SIP(戦略的イノベーション創造プログラム)は13日、金沢市内のKKRホテル金沢で最終成果報告会を開催した。2014年12月のキックオフシンポジウムから約4年半の活動で実践した内

容を発表したほか、横浜国立大学の席特別教授でSIPインフラプログラムディレクター(PD)の藤野陽三氏がインフラマネジメントをテーマとした基調講演を行った。研究開発責任者を務めた金沢大学の鳥居和之特任教授はいさつで、「地域の方々からの支援で、SIPを進めることができた。我々のSIPは、3年目く

らいから成果が出てきており、高い評価をいただいている」と振り返った。また、北陸SIPが作成した「北陸地方の市町村が管理する短支間橋梁における標準的な維持管理の手引き(案)」に触れ、

「北陸SIPに参画する30代、40代の学識者が北陸4県の32市町を2人1組で回りインタビューした成果をまとめた。市町村が抱える

維持管理の課題に対応したマニュアルは中央から発刊されていない」と地方自治体向け維持管理マニュアルとして活用していくことを報告した。地域実装活動の概要と今後への期待について、金沢工業大学の宮里心一教授が基調報告を行った。研究の目的について人員不足、財源不足で道路橋のサー

ビス水準・安全性の低下が懸念される市町村を対象に、点検、診断、補修・更新の手法を確立し、継続的に利活用される仕組みづくりを

成果報告では、「早期劣化橋梁に対する載荷試験とモニタリング」(金沢大学・深田幸史教授)、「ASR劣化構造物の橋梁点検時における簡易補修対策」(同・久保善司准教授)、「フライアッシュコンクリートの地域標準化に向けた取り組み」(富山県立大学・伊藤始教授)、「自治体職員を対象とした技術展示会の開催とその成果」(金沢工業大学・花岡大伸講師)、「東北大学SIPと連携した福井県でのDBの導入」(福井県建設技術公社・臼井裕喜氏)、「他地域における維持管理の合理化の取組みと北陸への期待」(金沢工大・田中泰司准教授)が発表された。



北陸地区の大学の連携も進んだ